

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 多良間方言の韻律構造の解明に向けて： 動詞進行融合形の音調の記述とその分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-07-16 キーワード (Ja): キーワード (En): prosody, lexical prosodic system, fused form, Tarama dialect 作成者: セリック, ケナン, 青井, 隼人, CELIK, Kenan, AOI, Hayato メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003441">https://doi.org/10.15084/00003441</a>

## 多良間方言の韻律構造の解明に向けて

### ——動詞進行融合形の音調の記述とその分析——

セリック ケナン<sup>a</sup>      青井隼人<sup>b</sup>

<sup>a</sup> 国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域

<sup>b</sup> 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所／国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域

#### 要旨

本稿では、南琉球宮古語多良間<sup>なかすじ</sup>仲筋方言を対象とし、進行融合形の音調に関する詳細な調査結果を報告した上で、多良間方言の韻律構造について新たな分析を提示する。本稿の主な結果は次の3点である。第一に、k-「来る」の進行融合形の音調に基づき、空となる韻律語の存在を認める必要がある。第二に、表層のレベルで1つの韻律語を形成するかのように見える環境を含め、進行融合形はどの環境においても、少なくとも基底のレベルにおいて、2つの韻律語を形成する。第三に、一部の進行融合形について、これまでの全ての先行研究の予測に反して、下降調と上昇調とで異なる韻律構造が写像される。

以上の3点の結果に基づき、多良間方言の韻律構造、特に韻律語の形成規則について新しい分析を提案する。つまり、進行融合形などの韻律的な振る舞いから、従来のように韻律語の形成を後語彙的 (post-lexical) な規則によって写像されるものとして分析することが難しく、韻律語の形成は基底のレベルで指定されているという分析を採用するべきであることを主張する。残された課題として、進行融合形の下降調と上昇調の間で観察される「韻律構造の交替」のメカニズムの解明がある。その生起要因については現時点ではよく分かっていないものの、本稿では進行融合形・進行非融合形それぞれの表層形に着目し、補助動詞 bur- とその接語化形式 =l の音調を互いに揃えようとする制約が働いている可能性を指摘する\*。

**キーワード：**韻律構造, アクセント体系, 融合形, 多良間方言

#### 1. はじめに

多良間方言のアクセント体系およびその韻律構造については、これまで主に名詞に観察される音調を中心に論じられてきた。しかし、名詞は形態論が比較的単純であり、当該方言において形態的現象に伴って起こる音調の交替を観察するための十分な資料を提供しない。言い換えれば、相対的に複雑な形態論を示す他の品詞、すなわち動詞と形容詞を観察の対象としない限り、形態的現象がアクセント型の実現や韻律構造とどのように連動しうるかに関して考察することはできない。

ごく近年に、多良間方言の動詞と形容詞の基本的な音調がセリック (2020) によって報告され

\* 本稿は第一著者が第110回方言研究会で行った発表内容を敷衍したものである。いつも方言調査に協力して下さる渡久山春英氏に感謝申し上げます。本稿の執筆にあたり、木部暢子氏と五十嵐陽介氏から有益なコメントを頂いた。なお、この研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成」(プロジェクトリーダー：木部暢子)、及び「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」(プロジェクトリーダー：窪園晴夫)の成果である。また以下の助成を受けている：科研費19K13174, 20H01259。

た。その中で動詞の進行融合形（動詞の接続形と補助動詞 bur-「IPF」の2語から成る分析的な構文が音韻的に融合した形式）について、名詞には全く見られない韻律的な現象が報告されている。第一に、アクセント型の条件異音の1つである「上昇調」において、進行融合形の形態統語構造に対応しない韻律語の構造、より具体的に言えば、動詞語根を割るような韻律語の構造が写像される。第二に、短い動詞の場合に、これまで存在しないとされていた1拍の韻律語が形成される。しかし、セリック（2020）は動詞・形容詞の基本的な音調を明らかにすることを主眼としていたため、これらの現象について十分なデータに基づいた一般化を提示できていなかった。本稿では、進行融合形の音調を対象とした詳細な調査結果に基づき、その韻律構造を明らかにする。

## 2. 用例とアクセント資料の提示の仕方

本稿で提示する用例やアクセント資料に付す記号をここに一覧する。

- (1) a. 韻律語境界：( )
- b. 韻律句境界：{ }
- c. 複合語境界：+
- d. 接語境界：=
- e. 接辞境界：-
- f. ピッチの下降：]
- g. ピッチの上昇：[

多良間方言では3つのアクセント型（a型・b型・c型）を区別する。本稿では、アクセント型を当該語根の右肩に上付きの文字で表示する。またb型およびc型について、低音調が結びつく拍を下線付きの太字で表す（2）。なお多良間方言のアクセント体系は3節で詳述する。

3節で詳しく記述するように、多良間方言のアクセントは、環境によって、下降調と上昇調とが交替する。本稿では、上昇調で実現する場合に限り、例文の前に「[...]」を添える（2-ii）。これは上昇調の実現には先行する韻律句でアクセントによる下降が実現している必要があることを示している（青井2018）。なお、基底形を「// //」で示す（3）。

- (2) i. { (jadu<sup>b</sup>)=(ma]i) } { (ne:<sup>c</sup>-n)=([ti:]) } ...「戸もないと…」
- ii. [... { (jadu<sup>b</sup>)=(ma]i) } { ([ne:<sup>c</sup>-]n)=([ti:]) } ...「戸もないと…」
- (3) // kimi-i bu[ // 「決める -CVB IPF」

## 3. 問題の背景

### 3.1 多良間方言アクセント論の素描

多良間方言は3種類のアクセント型が区別される（松森2010）。この3種類のアクセント型（a型・b型・c型）はピッチの変動の有無とその位置によって対立している（4）（5）（青井2016；松森2014；五十嵐2015）。さらに各アクセント型は2つの条件異音を持つ。つまり環境によって

下降パターンと上昇パターンの2種類が交替する（松森 2016；青井 2016, 2017, 2018）。本稿では前者の実現形を「下降調」、後者を「上昇調」と呼ぶ。「韻律句」を「1つのアクセント型が実現する単位」のように定義すると、下降調と上昇調の出現条件は次のように一般化することができる。すなわち下降調は発話頭の環境、もしくは上昇調で実現する b 型か c 型の韻律句が先行する環境で現れ、上昇調は下降調で実現する b 型か c 型の韻律句が先行する環境で現れる。なお、先行する b 型か c 型の韻律句は、必ずしも当該韻律句のすぐ直前に隣接する必要はなく、間に複数の a 型の韻律句が介在しうる。

(4) 各アクセント型の実現例（下降調）

- i. a 型 juda<sup>a</sup>=mai ne:n「枝もない」
- ii. b 型 jadu<sup>b</sup>=ma]i ne:n「戸もない」
- iii. c 型 ma]du<sup>c</sup>=mai ne:n「暇もない」

(5) 各アクセント型の実現例（上昇調）

- i. a 型 ]... juda<sup>a</sup>=mai ne:n「枝もない」
- ii. b 型 ]... jadu<sup>b</sup>=mai [ne:n「戸もない」
- iii. c 型 ]... madu<sup>c</sup>=[mai ne:n「暇もない」

各アクセント型のピッチパターンを正しく記述するためには、モーラと韻律句の間に位置する「韻律語」という韻律的単位を導入する必要がある（五十嵐 2015, 2016）。先行研究は、この単位が2モーラ以上の形態素によって形成される（言い換えれば1モーラの形態素は韻律語を形成しない）としている点で一致している（松森 2014；青井 2016；五十嵐 2015, 2016）。五十嵐（2016: 2）はさらに、多良間方言と池間方言を対照した研究において、韻律語を「2モーラ以上の語根・接語が写像される韻律的単位」と定義している。ここで五十嵐（2016）が「2モーラ以上の形態素」ではなく、「2モーラ以上の語根・接語」としているのは、少なくとも池間方言の接辞は、2モーラ以上であっても韻律語を形成しないという観察に基づいている。ただし、多良間方言の接辞が韻律語を形成するか否かは、当該方言の資料を精査した上で検討する必要があることを五十嵐は同論文で指摘している。この点に関して、青井（2016）は、独自の資料に基づいて「2拍以上の接辞は韻律語を形成しない」ことを主張したが、提示されている資料は過去接辞 -ta[のみであり、十分な検討が行われているとは言い難い。

(6) に五十嵐（2016）の枠組みに従って多良間方言の韻律語がどのように形成されるかを示す。

- (6) i. (funi<sup>c</sup>=]nu)(ne:<sup>c</sup>-n)「船がない」
- ii. (fu]ni<sup>c</sup>)=(mai)(ne:<sup>c</sup>-n)「船もない」

(6) において、funi<sup>c</sup>「船」は2モーラの語根であるため、韻律語を形成する。同様に (6-ii) における =mai 「=INC」は2モーラの長さを持つ接語であるため、韻律語を形成する。一方、(6-i) における =nu 「=NOM」は1モーラの接語であり、「2モーラ以上」の要件を満たさない。このと

き =nu はそれ単独では韻律語を形成せず、先行する語根（もしくは接語）によって形成される韻律語の中に組み込まれる。また -n 「-NEG」は接辞であるため、やはり韻律語を形成しない。-n は先行する動詞語根が形成する韻律語に組み込まれる。

(6-i) と (6-ii) を比較すると、同じ名詞語根 funi であっても、後続する接語によって異なる韻律構造が写像されることが分かる。すなわち (6-i) では (funi=nu) となるのに対して、(6-ii) では (funi)=(mai) となる。その結果、同じアクセント型でありながら、異なる実現が観察される（より具体的に言えば、ピッチ下降が異なる位置で観察される）。

韻律語を導入することで初めて多良間方言のアクセント型の音韻的な解釈が可能になる。まず b 型のピッチ変動に注目すると、それは常に 2 つ目の韻律語にあることが分かる。つまり下降調の場合は変動が 2 つ目の韻律語の次末モーラに現れ、上昇調の場合は変動が 2 つ目の韻律語の末尾モーラに現れる。一方、c 型のピッチ変動に注目すると、それは常に 1 つ目の韻律語にあることが分かる。つまり下降調の場合は変動が 1 つ目の韻律語の次末モーラに現れ、上昇調の場合は変動が 1 つ目の韻律語の末尾モーラに現れる。

次に下降調と上昇調とを比較してみよう。すると、b 型では下降調・上昇調にかかわらず、常に 2 つ目の韻律語の末尾モーラが低いことに気づく。同様に c 型では常に 1 つ目の韻律語の末尾モーラが低い。この特徴に着目して、青井 (2019) は「欠性的低音調」の分析を提案している。この分析によると、a 型は低音調が指定されていないのに対し、b 型は 2 番目の韻律語の末尾拍、c 型は 1 番目の韻律語の末尾拍にそれぞれ低音調が指定されている (表 1)。以下、低音調が指定されている拍を「低拍」と呼ぶ。

表 1 多良間方言のアクセント型の音韻的解釈

アクセント型	1 番目の韻律語	2 番目の韻律語
a 型		
b 型		✓
c 型	✓	

✓: 末尾拍に低音調の指定有

青井 (2019) は、各アクセント型の上昇調と下降調の条件異音を説明するために「低音調拡張規則」と「低音調削除規則」の 2 つの規則を導入している。「低音調拡張規則」とは、アクセント型によって指定される低音調が韻律句の境界を越えて右へと拡張していく規則である。そして「低音調削除規則」とは、低音調の拡張は次の低音調の連結線を越えることはできず、OCP (必異原理) に従って後続の低音調が削除されるという規則である。その結果、デフォルトの高音調が次の拍から実現する (なお発話もデフォルトの高音調で始まる)。以下の (7) にアクセント型の実現の例を示し、想定されている 2 つの規則の働きを図で示す。

- (7) a. {[a]dza<sup>̂</sup>=(mai)} {(jumi<sup>̂</sup>)=(mai)} ... 「兄も嫁も…」  
 b. {[a]dza<sup>̂</sup>=(mai)} {(uja<sup>̂</sup>)([mai])} ... 「兄も父も…」

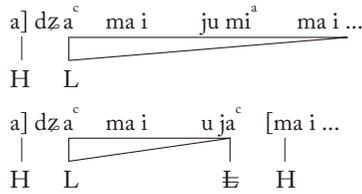


図1 「低音調拡張規則」と「低音調削除規則」の働き

従来の多良間方言のアクセントは主に名詞の振る舞いに基づいて一般化されてきた。したがって上記の韻律語の定義も名詞の振る舞いに基づいて成されたものだった。セリック (2020) は、多良間方言の形容詞および動詞のアクセントを詳細に記述した上で、従来の韻律語の定義に対して次の2つの修正を提案している。すなわち、A. 2 モーラ以上の接辞の一部が韻律語を形成する、B. 語彙的語根であれば1 モーラの長さでも韻律語が形成されうる。この2点については3.2節でより詳しく論じる。

### 3.2 動詞アクセント

本節ではセリック (2020) に基づいて、多良間方言の動詞アクセントの特徴を整理する。アクセントの特徴によって多良間方言の動詞は2つの動詞類 (a型動詞とbc型動詞) に分かれる。すなわちa型動詞はその活用形が一貫してa型に分類されるのに対して (8), bc型動詞は活用形によってb型とc型が交替する (9)。

#### (8) a型動詞の活用形の例 nak- 「泣く」

- i. 基本形: nak<sup>a</sup>
- ii. 連体基本形: nak<sup>a</sup>
- iii. 未来形: nak<sup>a</sup>-gumata
- iv. 否定形: naka<sup>a</sup>-n

#### (9) bc型動詞の活用形の例 kak- 「書く」

- i. 基本形: kak<sup>c</sup>
- ii. 連体基本形: kak<sup>b</sup>
- iii. 未来形: kak<sup>b</sup>-gumata
- iv. 否定形: kaka<sup>c</sup>-n

a型動詞は、どの活用形も低音調の指定がなく、ピッチ変動が観察されない。一方、bc型動詞は低音調の指定によるピッチ変動が活用形に依らず観察される。具体的にbc型動詞の活用形の音調を検討してみよう。(10)に例を提示する。

#### (10) kak- 「書く」の過去否定形、意志形、意志否定形の音調

- i. 過去否定形: kaka-]da-ta[ 「書く -NEG-PST」

- ii. 意志形：ka]ka-dzɔ: 「書く -VOL」
- iii. 意志否定形：ka]ka-man 「書く -VOL.NEG」

過去否定形においては、否定接辞 -da の前にピッチの下降が実現しており、そこに低音調の指定があることが分かる。同様に、意志形と意志否定形においては、動詞語幹 kaka の末尾拍の前にピッチの下降が実現しており、そこに低音調の指定があることが分かる。アクセント型によって指定される低音調は韻律語の末尾拍に位置するため、低音調が結びついている拍の直後に韻律語の境界があると解釈できる。したがって、過去否定形においては過去接辞 -tal の前に (11-i)、意志形においては意志接辞 -dzɔ: の前に (11-ii)、そして意志否定形においては意志否定接辞 -man の前に (11-iii) 韻律語の境界があると解釈しなければならない。つまり、この3つの接辞は韻律語を形成すると結論づけることができる（韻律語を形成する接辞のリストの詳細はセリック (2020: 121) を参照）。このように、接辞は韻律語を形成しないとす五十嵐 (2016) の仮定は、少なくとも多良間方言に関しては改訂されなければならない。

(11) kak- 「書く」の過去否定形、意志形、意志否定形の韻律構造

- i. 過去否定形：(kaka-]da)-(tal)
- ii. 意志形：(ka]ka)-(dzɔ:)
- iii. 意志否定形：(ka]ka)-(man)

「2拍以上の接辞の中に韻律語を形成するものがある」という事実は、韻律構造を明らかにする上で重要である。なぜならば、(11-i) のように過去接辞 -tal が韻律語を形成すると分析するのであれば、その必然的な結果として、(12) に示すように、変則型動詞の過去形の韻律構造について1拍の韻律語を認めざるを得なくなるからである。

- (12) i. (s<sup>a</sup>)-(tal) 「する -PST」  
 ii. (k<sup>b</sup>)-(tal)] 「来る -PST」  
 iii. (bu<sup>a</sup>)-(tal) 「居る -PST」  
 iv. (a<sup>b</sup>)-(tal)] 「有る -PST」

(12) では1拍の動詞語根が韻律語を形成しており、「2モーラ以上」という従来の韻律語の定義から逸脱している。セリック (2020) の議論に基づけば、「2モーラ以上」の指定は接語あるいは接辞にのみ適用される制約であり、語彙的語根（または語幹）であれば1拍でも韻律語が形成されうると考えなければならない (12)。

### 3.3 進行融合形のピッチパターン

本節では、進行融合形の形態的な作りを解説し、先行研究による進行融合形の音調の実現と解釈を述べた後、その問題点を指摘する。

### 3.3.1 進行非融合形と進行融合形の形態的な作り

多良間方言の進行形は、動詞の接続形と補助動詞として機能する bur- (bur-<sup>a</sup>「居る」と同源) から構成される (13) (14)。進行融合形は補助動詞の最初の拍が脱落し、残りの分節音が先行する接続形に接語化した形式である (15) (16)。共時体系において融合していない進行形 (非融合形) と進行融合形は自由に交替できる。ただし, ki:-「着る」, bi:-「座る」, ni:-「煮る」, mi:-「見る」のようにその語根が i: で終わる 2 拍の II 類動詞は (おそらく非過去形との同音衝突を避けるために) 進行融合形を持たない。

(13) kimi-i        bu|  
 決める -CVB    IPF  
 「決めている」

(14) kimi-i        bura-n  
 決める -CVB    IPF-NEG  
 「決めていない」

(15) kimi-i=| (音声形は [kimi:|])  
 決める -CVB=IPF  
 「決めている」

(16) kimi-i=ra-n (音声形は [kimi:ran])  
 決める -CVB=IPF-NEG  
 「決めていない」

進行融合形は、2 語から成る構文である非融合形と自由に置き換えられる。また接続形と補助動詞の間に助詞 (=du 「=FOC」, =mai 「=INC」など。ただしその場合、非融合形が義務的になる) が割り込むことができるため、基底形においては 2 語から成るという分析が可能である。つまり、補助動詞の 1 拍目の削除とその接語化という 2 つの随意的な規則を設けて、(17) のような分析を提案することができる。

(17) kimi:| 「決めている」の派生過程  
 a) 基底形:        //kimi-i bu|// 「決める -CVB IPF」  
 b) 第 1 拍削除:    kimi: |  
 c) 接語化:        kimi:=|

### 3.3.2 進行融合形の韻律構造と先行研究の問題点

進行融合形は接続形を基に形成されるので、接続形のアクセント型を継承していると考えられることができる。以下の (18) で示すように、接続形を介して作られる進行非融合形のピッチパターンから、bc 型動詞の接続形は c 型に分類されることが分かる。したがって進行融合形も c 型に分

類される、つまり1番目の韻律語の末尾拍に低音調が指定されることが予測される。

(18) bc型動詞の接続形のアクセント型

- i. (kimi:]<sub>1</sub>)(bul)
- ii. ]...(kimi:]<sub>1</sub>)([bul)

では実際に進行融合形の音調を見てみよう。表2は進行融合形の6つの形式の音調を記述したものである。

表2 進行融合形の音調と韻律的解釈 (kimi-「決める」の場合)

語形		音調	韻律的解釈
進行融合過去否定形 「決める .CVB =IPF-NEG-PST」	下降	kimi:=]ra-da-ta[=ti:=mai ...	(kimi:)=(ra-da)-(ta]
	上昇	]... kimi:=[ra-da-ta[=ti:=mai ...	
進行融合否定形 「決める .CVB =IPF-NEG」	下降	kimi:-]ra-n=ti:=mai ...	(kimi:)=(ra-n)
	上昇	]... kimi:-[ra-n=ti:=mai ...	
進行融合過去形 「決める .CVB =IPF-PST」	下降	kimi:=]ta[=ti:=mai ...	(kimi:)=(ta]
	上昇	]... kimi:=[ta[=ti:=mai ...	
進行融合基本形 「決める .CVB =IPF」	下降	kimi:=][=ti:=mai...	(ki)(mi:]=]
	上昇	]... ki[mi:]=[=ti:=mai...	
進行融合未来形 「決める .CVB =IPF-FUT」	下降	kimi:=][-gumata	(ki)(mi:]=](-gumata)
	上昇	]... ki[mi:]=[ -gumata	
進行融合意志形 「決める .CVB =IPF-VOL」	下降	kimi:=]ra-dz:]	(ki)(mi:=ra)-(dz:]
	上昇	]... ki[mi:=ra-dz:]	

表2の最初の3つの形式（進行融合過去否定形、進行融合否定形、進行融合過去形）の音調やその韻律的な解釈については、その形態統語構造から写像される韻律構造と実現のピッチパターンとの間に齟齬がなく、特に問題はない。ところが残りの3つの形式（進行融合基本形、進行融合未来形、進行融合意志形）の音調は、その形態統語構造によって写像される韻律構造からは予測できないパターンを示しており、その分析が問題となる。

問題となる3つの形式は共通のピッチパターンを示している。つまり下降調では接語化した補助動詞の前に下降が実現し、上昇調では動詞語幹内部でピッチの上昇が実現する(19)。これまでの枠組みに従えば、ピッチの上がり目の直前の拍には低拍があり、そして低拍の右には韻律語の右端が挿入されている。したがって(19-ii)の上昇調から想定される韻律構造は(ki)(mi:]=]ということになる(19-iii)。しかしこの韻律構造は動詞の語幹を割り込んでおり、形態素境界と韻律語境界とが一致していない。言い換えれば、韻律語が形態統語構造によって写像されるという従来の仮定(松森2014;五十嵐2015, 2016;青井2016)とそぐわない。

- (19) i. kimi:=][=ti:=mai... 「決めているとも…」
- ii. ]... ki[mi:]=[=ti:=mai... 「決めているとも…」

## iii. (ki)(mi:=l) (ii. に基づく韻律構造の解釈)

(19) のような、形態素境界と韻律語境界とが一致しない構造が生じる条件は、どのようなものだろうか。進行融合過去否定形と進行融合意志形の違いを例に取って説明する。まず、過去否定形では、-tal [-psT] が韻律語を形成するためこれを除くと、残りの部分は =ra-da [=IPF-NEG] となる。=ra-da は 2 拍であるため、そのまま韻律語を形成することができる。一方意志形では、韻律語を形成する -dzɪ: [-voL] を除くと、残る部分は =ra [=IPF] となる。=ra は基底形では 2 拍 //bura// であり、本来なら韻律語を形成することができるが、接語化に伴い 1 拍となっているため、「1 拍の接語は韻律語を形成できない」という制約に従って、単独では韻律語を形成することができない。その解決策として、ホストから必要となる 1 拍分（ホストの語末音が長音である場合は、1 音節分）を奪って韻律語を形成する。その結果が (20-ii) に示した動詞語幹を割り込む韻律構造である。なお接語にモーラを奪われた語幹には、1 拍分の長さしか残されていないが、語彙的語根であるため、「2 拍以上」の制約は被らない。進行融合基本形と進行融合未来形についても同じ分析が適用できる。

- (20) i. ]... (kimi:)=([ra-da)-(tal)=(ti:)=(mai) ... 「決めていなかったとも…」  
 ii. ]... (ki<sup>c</sup>)([mi:=ra)-(dzɪ:) 「決めていよう」

上の分析は、問題となる 3 つの形式の上昇調についてはうまく説明ができる。一方、下降調の音調については問題が残る。上昇調と下降調において同じ韻律語の構造が写像されることを前提にすると、進行融合基本形の下降調の形式は (21) に示すように分析しなければならない。しかし、(21) の韻律構造を想定すると、接続形のアクセント型によって指定されている低拍は、1 番目ではなく、2 番目の韻律語の末尾拍に指定されることになり、接続形のアクセント型が c 型であることと矛盾する。

- (21) (ki<sup>c</sup>)(mi:=l)=ti:=mai... 「決めているとも…」

(21) について、同じ拍に（発話の頭などに現れる）高音調と（アクセント型によって指定されている）低音調が同時に結びつき得ないという制約を想定することで、低音調が右に移動すると説明することもできるかもしれない。しかしこの説明が適切ではないことは (22) から分かる。すなわち 3 モーラ以上の bc 型動詞語根を基に進行融合基本形を構成した場合にも、(20) と同様に上昇調と下降調とで一貫しないピッチパターンが得られる。

- (22) i. nau:ci:]]=ti: ... 「直していると…」  
 ii. ]... nau[ci:]]=ti: ... 「直していると…」  
 iii. nara:ci:]]=ti: ... 「教えていると…」  
 iv. ]... nara:[ci:]]=ti: ... 「教えていると…」  
 v. dumavvi:]]=ti: ... 「混乱していると…」  
 vi. ]... dumav[vi:]]=ti: ... 「混乱していると…」

上昇調のピッチパターンに適した形で (nau)(ci:=l) 「直す .CVB=IPF」のように動词语幹を割り込む韻律語の構造をまずは仮定してみよう。このとき下降調ではどのようなピッチパターンが予測されるだろうか。接語化した補助動詞によって本動詞の語末音節が奪われたとしても、1 番目の韻律語は 2 モーラ以上の長さを持つ。ここで上の仮説に従えば、kimi- の場合と違って、高音調と低音調の衝突が起こらないはずである。なぜなら 1 拍目にデフォルトの高音調、2 拍目に低音調が指定されると想定できるからである。つまり、接続形のアクセント型の実現に従って、一番目の韻律語の末尾拍に低拍が現れる (na]u̇)(ci:=l) というパターンが予測される。しかしながら実際には接語化する拍に低拍が位置する nau̇ci:=l] のパターンが観察される。このパターンを接続形のアクセント型 (c 型) に基づいて解釈すれば、(nau̇ci:=l] のような韻律語の構造になる。しかしこの構造は、上昇調のパターンに適した構造 (nau̇)([ci:=l) とは一致しない。

ここまでの議論を整理しよう。従来の研究では、韻律構造は形態統語構造から写像されると仮定していた。ところが進行融合形のピッチパターンを見ると、実際の下降調・上昇調のピッチパターンを同じ韻律構造から導くことができない。進行融合形の韻律構造を明らかにするためには、特にその下降調についての十分なデータが必要となるが、これまでに十分な量が蓄積されているとは言えない。そこで本稿では、進行融合形について、形態統語構造や動词语根の拍数・音節構造を統制した様々な辞文における音調を調べた結果を報告し、その解釈を試みる。

#### 4. データ

本稿で使う進行融合形の発話データは、2020 年 11 月に数回に分けて行った電話調査で収集した。インフォーマントは多良間仲筋方言の母語話者である渡久山 春英氏 (男性・昭和 11 年生) 1 名が務めて下さった。

電話調査は、国立国語研究所の静かな部屋において固定しておいた携帯電話をスピーカーにした状態で行った。ZOOM H4n Pro の内蔵マイクを使用し、WAV 48kHz/24bit のフォーマットで録音した。電話通信を介した録音であるため必ずしも良質の録音とは言えないが、Praat (Boersma & Weenink 2020) においてピッチの曲線が算出されるなど、ピッチの変動を確認するには十分な音質であった。

調査内容は次の通りである。「語根の長さ」と「語根の音節構造」を考慮して、(23) に示す 12 語の bc 型動詞を調査語彙として選び出した。a 型動詞は、一貫して低音調の指定がなくピッチの変動がないため、各動詞形の韻律構造を明らかにするための手掛かりを得られず、したがって観察対象外とした。

- (23) 調査対象動詞：baka-「奪う」、dumavv-「混乱する」、jum-「読む」、k-「来る」、kavv-「被る」、kimi-「決める」、mat-「待つ」、mut-「持つ」、nara-「習う」、nara:s-「教える」、naus-「直す」、uguri-「怒る」

各動詞に対して、(24) に示す枠文を下降調と上昇調の環境で調べた<sup>1</sup>。進行融合形の調査に加えて、対象の動詞の基本形も (24-a, c~q) の枠文で併せて調べた。

(24) 調査対象枠文 (kimi-「決める」を例に取る)

- a) kimi:=[=ti: ... 「決める .CVB =IPF=QUOT (決めていると…)」
- b) kimi:=[-gumata ... 「決める .CVB =IPF=FUT (決めているべき…)」
- c) kimi:=[=nu ... 「決める .CVB =IPF=NOM (決めているのが…)」
- d) kimi:=[=nu=du ... 「決める .CVB =IPF=NOM=FOC (決めているのが…)」
- e) kimi:=[=a ... 「決める .CVB =IPF=TOP (決めているのは…)」
- f) kimi:=[=tu ... 「決める .CVB =IPF=COM (決めているのと…)」
- g) kimi:=[=tu=du ... 「決める .CVB =IPF=COM=FOC (決めているのと…)」
- h) kimi:=[=to=: ... 「決める .CVB =IPF=COM=TOP (決めているのとは…)」
- i) kimi:=[=u=ga ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=GEN (決めているの…)」
- j) kimi:=[=u=ga ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=NOM (決めているのが…)」
- k) kimi:=[=u=ga=du ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=NOM=FOC (決めているのが…)」
- l) kimi:=[=o=: ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=TOP (決めているのは…)」
- m) kimi:=[=o=:tum ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=TOP=EMPH (決めているのさえ…)」
- n) kimi:=[=u=: ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=ACC (決めているのを…)」
- o) kimi:=[=u=:du ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=ACC=FOC (決めているのを…)」
- p) kimi:=[=u=nke: ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=DIR (決めているのに…)」
- q) kimi:=[=u=kara ... 「決める .CVB =IPF=NMLZ=ABL (決めているのから…)」
- r) kimi:=[ta=ti: ... 「決める .CVB =IPF.PST=QUOT (決めていたと…)」
- s) kimi:=[ra-n=ti: ... 「決める .CVB =IPF-NEG=QUOT (決めていないと…)」
- t) kimi:=[ra-dz?=-ti: ... 「決める .CVB =IPF-VOL=QUOT (決めていようと…)」
- u) kimi:=[ra=ti: ... 「決める .CVB =IPF.VOL= QUOT (決めていようと…)」
- v) kimi:=[ra-da-ta=ti: ... 「決める .CVB =IPF-NEG-PST= QUOT (決めていなかったと…)」

さらに調査対象の k-「来る」、baka-「奪う」、uguri-「怒る」の進行融合形 (それぞれ ki:l, bake:l, uguri:l) との最小対 (minimal pair) または準最小対 (quasi-minimal pair) が得られるように、追加調査として (25) に示す動詞を対象とし、やはり (24) の枠文を用いて (ただしその全てを訊ねたわけではない) その基本形の音調を調べた (詳細は本稿の「関連データ」を参照されたい)。

(25) 追加調査対象動詞 (基本形のみ): mi:l「見る」、bake:l「別れる」、uguna:l「集まる」

<sup>1</sup> 下降調は枠文を発話の頭の環境で収録し、上昇調は枠文の前に m]me<sup>c</sup>「もう」または kju: =ma]i<sup>b</sup>「今日も」の句を添えて収録した。

調査方法はエリシテーションによる。対象の枠文を発音してもらうよう、適切な標準語の文を提示し、多良間方言に翻訳してもらった。対象の文が得られなかった場合は、対象の枠文を説明し、多良間方言において文法的であることを確認してもらった上で、発音してもらった。

調査分析は次のように行った。Praat を用いて、調査で得られた音声ファイルを自動的に区切った上で各アクセント資料に対して書き起こしを行い、聴覚印象とピッチの曲線の視覚的検討に基づいてピッチの変動をマークした。その後、作成した Praat グリッドから個別のアクセント資料の音声とその情報を自動的に抽出し、適切なタグ付けなどを加えてデータベース化した。本稿では、全部で 1718 点のアクセント資料（重複を含む）を収納するこのデータベースに基づいて考察を行う。なお、データベースとそれにリンクされている音声ファイルの情報は本稿の関連データとして公開している。

## 5. 結果

本節では枠文を 3 つのグループに分けて調査結果を報告する。5.1 節では韻律語を形成する 2 拍以上の接語・接辞が付く枠文を扱う。5.2 節では 1 拍接語が付く枠文を扱う。最後に 5.3 節では 1 拍接語の連鎖が付く枠文を扱う。なお、調査結果を評価する際に、表 3 に示すように、接続形の長さに基づいて、対象動詞を 3 つの群に分けることが有効である。

表 3 接続形の長さによる対象動詞の分類

群	A.	B.	C.
X.CVb (拍数)	2 拍	3 拍	4 拍以上
X.CVb=IPF (拍数)	3 拍	4 拍	5 拍以上
X.CVb=IPF (音節数)	1 音節	2 音節	2 音節以上
語例	k- 「来る」 ki: 「来る .CVb」 kimi:=  「来る .CVb=IPF」	kimi- 「決める」 kimi: 「決める .CVb」 kimi:=  「決める .CVb=IPF」	naus- 「直す」 nauci: 「直す .CVb」 nauci:=  「直す .CVb=IPF」

各群の所属語を (26) に示す。

### (26) 接続形の長さによる対象動詞の語群

A 群: k- 「来る」

B 群: baka- 「奪う」, jum- 「読む」, kimi- 「決める」, mat- 「待つ」, mut- 「持つ」,  
nara- 「習う」

C 群: dumavv- 「混乱する」, kavv- 「被る」, nara:s- 「教える」, naus- 「直す」, uguri- 「怒る」

### 5.1 進行融合形に韻律語を形成する 2 拍以上の接語・接辞が付く環境

進行融合形に韻律語を形成する 2 拍以上の接語・接辞が付く枠文は「X.CVb=IPF=QUOT ...」, 「X.CVb=IPF-FUT ...」, 「X.CVb=IPF.PST=QUOT ...」, 「X.CVb=IPF-VOL=QUOT ...」, 「X.CVb=IPF.VOL= QUOT ...」, 「X.CVb=IPF-NEG-PST= QUOT ...」の 6 つである。B 群と C 群に着目すると、下降調と上昇調の対応

の仕方について2つのケースが観察される。第一は下降調・上昇調それぞれの実現に即した韻律構造が一致するケースである。baka-「奪う」とuguri-「怒る」を代表例に取り、(27) (28)に「進行融合過去形」の音調を示す。

- (27) i. bake:=[ta] 「奪う .CVB=IPF.PST」  
 ii. ]... bake:=[ta] 「奪う .CVB=IPF.PST」

- (28) i. uguri:=[ta] 「怒る .CVB=IPF.PST」  
 ii. ]... uguri:=[ta] 「怒る .CVB=IPF.PST」

下降調では過去接辞の直前にピッチの下降が実現し、上昇調では過去接辞の直前にピッチの上昇が実現する。低音調が長母音の2拍目に指定されるとき、下降調におけるピッチの下降が1拍分遅れる傾向がある。このため(27) (28)の音調は、動詞の接続形の末尾拍に低音調が指定されていると解釈して矛盾はない。つまり低音調が結びついている拍の直後に韻律語の右端があるような韻律構造(29)を想定することができる。

- (29) i. (bake:˘)-(ta)  
 ii. (uguri:˘)-(ta)

第二は、下降調・上昇調それぞれの実現に即した韻律構造が一致しないケースである。(30) (31)に、引用接語=ti:が付いた「進行融合基本形」の音調を示す。このとき下降調では接語化する補助動詞の部分=[の直前にピッチの下がり目が実現する。一方、上昇調では接語化した補助動詞に先行する本動詞接続形の末尾音節の直前に上がり目が実現する。つまりピッチの変動が動詞語根の内部で実現するわけである。

- (30) i. bake:=[ti: 「奪う .CVB=IPF=QUOT」  
 ii. ]... ba[ke:=[ti: 「奪う .CVB=IPF=QUOT」

- (31) i. uguri:=[ti: 「怒る .CVB=IPF=QUOT」  
 ii. ]... ugu[ri:=[ti: 「怒る .CVB=IPF=QUOT」

(30) 下降調と(31) 上昇調の音調に即した形で韻律構造を解釈すると、次のようになる。まず下降調では、接語化する補助動詞の部分の直前にピッチの下がり目がある。したがって下がり目の直後の拍に低音調が結びついており、またそこに韻律語の右端があると解釈できる(32)。一方、上昇調では、接続形の末尾音節の前にピッチの上がり目がある。したがってその直前の拍に低音調が結びついており、またそこに韻律語の右端がある(つまり接続形の末尾音節が後続の韻律語に組み込まれる)と解釈できる(33)。

## (32) 下降調の音調の解釈

- i. (bake:<sup>c</sup>=l)=(ti:)
- ii. (uguri:<sup>c</sup>=l)=(ti:)

## (33) 上昇調の音調の解釈

- i. (ba<sup>c</sup>)([ke:=l)=(ti:)
- ii. (ugu<sup>c</sup>)([ri:=l)=(ti:)

このうち特に問題となるのは、すでに 3.3.2 節でも触れたように、上昇調から推測される韻律構造である。なぜなら上昇調では形態統語構造と一致する形で韻律構造が形成されていない、言い換えれば、動詞語根の内部を割り込むような形で韻律語の境界が挿入されているからである。さらにその韻律構造は、下降調の音調から推測される韻律構造と一致していない。bc 型動詞の接続形が c 型に所属することを重視すれば、下降調における進行融合基本形のピッチパターンを正しく予測するためには、(32) に示したように、1 つだけの韻律語が形成されるような韻律構造を解釈しなければならない。これは 2 つの韻律語が形成されるように見える上昇調の韻律構造とは明らかに異なっている。

仮に上昇調に即した形と同じ韻律構造が下降調のときにも写像されると考えると、下降調のピッチパターンを説明することができない。つまり (ba<sup>c</sup>)(ke:=l) のような韻律語の構造を想定すると、低音調は 2 番目の韻律語の末尾拍に指定されることになる。その場合、c 型 > b 型のアクセント型の交替、もしくは低音調の移動のような操作を仮定しなければならない。しかしそのような交替や操作を仮定しなければならない動機が明確でない。

上昇調と下降調とで想定できる韻律構造が一致しないという問題を議論するために、A 群に所属する k-「来る」の音調を見てみよう。k-「来る」の進行融合過去形の音調を (34) に示す。(34) では B 群と C 群の動詞と同じパターンが観察される。つまり下降調と上昇調それぞれに対して同一の韻律構造 (35) を想定することができる。

## (34) 進行融合過去形

- i. ki:=[ta] 「来る .CVB=IPF.PST」
- ii. ]... ki:=[ta] 「来る .CVB=IPF.PST」

(35) (ki:<sup>c</sup>)=(ta)

一方、進行融合基本形の音調を見てみよう (36)。下降調では、B 群と C 群と同様に、接語化する補助動詞の部分の直前にピッチの下降が実現している。その韻律構造の解釈を (37) に示す。しかし (36-ii) を見ると上昇調ではピッチの上昇が動詞語幹の前に実現している。アクセントによる上がり目が当該語根の前に現れる例はこれまでに報告されていない。

## (36) 進行融合基本形

- i. ki:=[l]=ti: 「来る .CVB=IPF=QUOT」  
 ii. ]...[ki:=[l]=ti: 「来る .CVB=IPF=QUOT」

(37) 下降調の音調の解釈: (ki:<sup>c</sup>=[l])=(ti:)

上昇調が観察される場合、ピッチの上がり目の直前の拍に低音調が結びついており、そこに韻律語の境界があると解釈される。上昇調における k-「来る」の進行融合基本形においては、動詞語根初頭から高音調で実現しているため、動詞語根 k- の直前に韻律語の右端があると解釈できる。つまり k-「来る」の進行融合基本形は 1つの韻律語を形成すると想定される (38)。

(38) 上昇調の音調の解釈: (ki:<sup>c</sup>=[l])=(ti:)

(38) の構造は、(37) に示した下降調の構造と一致しており、問題がないかのように見える。しかし (38) の構造では上昇調の実現を説明することはできない。つまり上昇調における k-「来る」の進行融合基本形がもし (38) のような韻律構造を持つのであれば、(39) に示す音調が実現するはずである。なぜなら k-「来る」の接続形は c型に分類されるため、低音調は接語化する補助動詞の部分 =[l] に結びつくはずだからである。言い換えれば先行する韻律句における低音調は =[l] の拍まで拡張し、引用接語 =ti: の直前から高く発音されるはずである。しかし実際には (39) のパターンは観察されず、(36-ii) のパターンが見られる。

(39) \*]... (ki:<sup>c</sup>=[l])=(ti:)

議論を分かりやすくするために、実際使用したアクセント資料を (40) に示す。(40) では、動詞語根 k-「来る」の直前にピッチの上昇が実現している。したがってアクセント型によって指定される低音調はその直前の拍、つまり発話の 1 番目の韻律句を形成する mme<sup>c</sup>「もう」の末尾拍にあると考えなければならない。ところが mme<sup>c</sup> は c型に所属する語であるため、1 番目の韻律語 (つまり mme) の末尾拍に低音調がすでに指定されている。したがって (38) の韻律語構造を想定した場合、mme<sup>c</sup> の末尾拍には 2つの低音調 (つまり mme が持つ低音調と k- に由来する低音調) が結びついていると分析しなければならない。

(40) m]me<sup>c</sup> [ki:<sup>c</sup>=[l]=ti: ...「もう来ていると…」

同じ拍に 2つの低音調が指定される可能性については、セリック (2020: 135-136) ですでに指摘されており、必ずしも問題になるわけではない。しかしながら次のような問題が指摘できる。つまり、(38) の韻律構造を想定すると、表層の音調を説明するためには、低音調の左方移動を仮定しなければならなくなる (図 2)。しかしこのような低音調の (しかも韻律句の境界を超えるような) 左方移動はなぜ起こるのか、現時点では妥当な説明をすることができない。

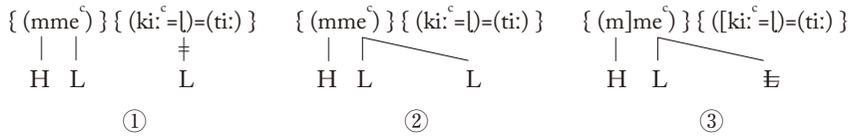


図2 k-「来る」の進行融合基本形の分析1：低音調の左方移動の分析

さらに(38)の韻律語構造と低音調の左方移動による分析(図2)が妥当ではないことが、基本形との比較で明らかになる。(41)にmi:-「見る」の基本形の音調を示す。mi:-「見る」の基本形は動词语根のmi:-と定性接辞-lから成っており、c型に分類される。k-「来る」の進行融合基本形とは最小対を成さないものの、同じ音節構造である。1拍の長さしかない定性接辞-lは韻律語を形成しないので、mi:lは1つの韻律語を形成すると解釈できる。つまり、(41)に対して、(42)の韻律構造を想定することができる。これは(38)で示したのと同じ構造である。

- (41) i. mi:<sup>c</sup>-l=ti: ... 「見ると…」  
 ii. m]me<sup>c</sup> mi:<sup>c</sup>-l=[ti: ... 「もう見ると…」
- (42) i. {(mi:-l)=(ti:)} ...  
 ii. {(m]me<sup>c</sup>)}{(mi:<sup>c</sup>-l)=(ti:)} ...

下降調では、k-「来る」の進行融合基本形とmi:-「見る」の基本形が同じパターンを示しているため、同じ韻律構造を想定しても問題がない。これに対して、上昇調では異なるパターンが観察される。すなわちmi:lの場合はピッチの上昇が引用接語=ti:の直前に実現する。これは、ちょうど(39)で示した、韻律構造から予測されるパターンと一致する。それに対し、ki:=[「来る.CVb=IPF」の場合はピッチの上昇が当該語根の前に現れる。k-「来る」の進行融合基本形とmi:-「見る」の基本形は、互いに同じモーラ数、同じ音節構造と同じアクセント型の形式であるため、上昇調における音調が異なるとすれば、その要因は韻律構造に求めるほかはない。

ここでB群とC群の進行融合形について、それらの上昇調の実現を思い出そう。(33)に示したように、両群の進行融合基本形は、上昇調で2つの韻律語を形成すると考えることができる。そして進行融合基本形の末尾音節が後続の韻律語に組み込まれた結果、ピッチの上がり目は進行融合基本形の末尾音節の直前に実現する。ではk-「来る」の進行融合基本形の場合にはどのように考えることができるだろうか。上昇調において、]... [ki:<sup>c</sup>=lのパターンが見られるが、k-「来る」の進行融合基本形ki:-は1音節だけであるため、この音節自体が「末尾音節」に該当する。したがって「進行融合形の末尾音節の前にピッチの上昇が実現する」という特徴は、B群とC群の場合と共通していると言える。この事実から、ki:lの韻律構造は、動词语根がB群もしくはC群の場合と同じ構造であると想定して差し支えない。つまりk-「来る」の場合も「進行融合基本形の末尾音節は後続の韻律語に組み込まれる」という解釈になる。ただし、B群・C群の動詞と異なるのは、k-「来る」の進行融合基本形が1音節だけであるため、末尾音節が後続の韻律語に組み込まれると、1番目の韻律語に入るべき動词语根側の分節音が残っておらず、空の韻律語が

形成されてしまうことである。しかし、空であっても、1 番目の韻律語であることには変わりはない。c 型によって指定される低音調がそこに結びついており、「低音調削除規則」を経て実現する<sup>2</sup> (図 3, 「ø」は空であることを示す)。

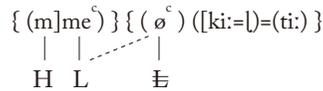


図 3 k-「来る」の進行融合基本形の分析 2: 中空の韻律語を仮定した分析

空となる韻律語を想定する分析に対して、奇妙と思われるかもしれない。しかし基底のレベルで進行融合形が 2 つの韻律語を形成するという分析は、次の節で報告する結果からも強く支持される。つまり、表層の音調からは 1 つの韻律語しか形成されないように見えても、基底のレベルでは、2 つの韻律語が形成されていると考えるべきピッチパターンが実際に観察される。これについては 5.3 節で詳しく論じる。

さて、ここで問題となっていた下降調の分析に立ち返ろう。本節の前半部で説明したように、下降調・上昇調それぞれの音調から想定される韻律構造は互いに一致しない (以下の (43) と (44) に再掲)。

(43) (= (32)) 下降調の音調とそれから想定される韻律構造の解釈

- i. (bake:=l)=(ti:)
- ii. (uguri:=l)=(ti:)

(44) (= (33)) 上昇調の音調とそれから想定される韻律構造の解釈

- i. ]...(ba^{\circ})([ke:=l)=(ti:)
- ii. ]...(ugu^{\circ})([ri:=l)=(ti:)

(43) (44) で示した解釈を比較すると、同じ形態統語構造であるにもかかわらず、下降調と上昇調とは韻律語の数が異なる。このような現象はこれまでの研究では報告されていない。そもそも、下降調と上昇調において異なる韻律構造が写像されることは想定されていない。しかしながら下降調における韻律構造を上昇調に倣って (ba^{\circ})(ke:=l)=(ti:) のように想定すると、2 番目の韻律語の末尾拍に低音調が現れることになり、進行融合形が c 型であることとは矛盾する。

<sup>2</sup> 非常に特殊な韻律的な振る舞いを示す vel「これ」に関する詳細な未公開データから、低音調が指定されている韻律語が空であるときに、低音調が先行する拍に結びつき、実現するという現象が確認されている (なお、vel「これ」の音調が「空の韻律語」という分析を強く支持する根拠ともなる)。したがって、k-「来る」の場合においても同じ現象が起きていると分析できる。つまり、進行融合形の末尾音節が 2 番目の韻律語に組み込まれた結果、アクセント型によって指定されている低音調が空の韻律語に結びついているため、実現するために、その直前の拍に結びつくことと想定できる。これは、下降調における k-「来る」の進行融合形が 1 つの韻律語だけを形成することを想定したときの「低音調の移動」とは全く異なる分析であることに注意されたい。つまり、「低音調の移動」の分析と違って、空の韻律語に指定される低音調が前の拍に結びつくという分析は、結びつきの不可欠である TBU がなくなったときに、必然的に隣接する TBU に結びつかなければならないという明白な動機に基づいている。

そこで、k-「来る」の上昇調の分析で、空となる韻律語の存在を認める必要があると判断したのと同じように、ここでも空の韻律語の存在を認め、基底のレベルにおいて、(43)ではなく、(45)のような構造を想定する。

(45) 下降調の音調の再解釈（丸括弧内に上昇調の解釈を示す）

- i. (ki:<sup>c</sup>=]l)(ø)=(ti:) (対 ]... (ø)([ki:<sup>c</sup>=l)=(ti:))
- ii. (bake:<sup>c</sup>=]l)(ø)=(ti:) (対 ]... (ba<sup>c</sup>)([ke:<sup>c</sup>=l)=(ti:))
- iii. (uguri:<sup>c</sup>=]l)(ø)=(ti:) (対 ]... (ugu<sup>c</sup>)([ri:<sup>c</sup>=l)=(ti:))

つまり、下降調と上昇調とで、韻律語の数は同じであるが、その境界の位置が異なっていると仮定する。ただし、下降調と上昇調とで異なる韻律語の構造が写像されることは、これまでの研究では予測されていないため、この解釈には依然として問題が残る。しかし下降調と上昇調とで異なる韻律構造を想定する必要があることは、5.3節で詳しく見るデータからも強く支持される。

## 5.2 進行融合形に1拍接語が付く環境

進行融合形に1拍の接語または1拍の接語と韻律語を形成する2拍の接語が付く環境には「X.CVb=IPF=COM」, 「X.CVb=IPF=NOM」, 「X.CVb=IPF=TOP」, 「X.CVb=IPF=NMLZ=ABL」の4つの枠文が該当する。

まず、上昇調で見られるパターンは全ての枠文で共通しており、前節で見たパターンと同じである(46)。すなわち、進行融合形(=[までの部分)の末尾音節の前にピッチの上昇が実現する。この音調からは(47)のような韻律構造を持つと解釈できる。

(46) 上昇調における音調

- i. ]... [ki:<sup>c</sup>=l=nu 「来る .CVb=IPF=NOM」
- ii. ]... ba[ke:<sup>c</sup>=l=nu 「奪う .CVb=IPF=NOM」
- iii. ]... ugu[ri:<sup>c</sup>=l=nu 「怒る .CVb=IPF=NOM」

(47) 上昇調における音調の解釈

- i. ]... (ø<sup>c</sup>)([ki:<sup>c</sup>=l=nu)
- ii. ]... (ba<sup>c</sup>)([ke:<sup>c</sup>=l=nu)
- iii. ]... (ugu<sup>c</sup>)([ri:<sup>c</sup>=l=nu)

次に、下降調では、枠文によって異なるパターンが観察された。実際に観察された音調を見る前に、予測される音調について述べておく。進行融合形に1拍の接語=μが付くと、その接語自体が単独で韻律語を形成できないため、進行融合形の韻律語の中に組み込まれることが予測される。下降調について前節の(32)と(37)で明らかにした進行融合形の韻律構造に従うと、(48)に示す音調が実現するはずである。

(48) 下降調において予測される音調

- i. (ki:<sup>c</sup>=[=]μ) 「来る .CVB=IPF=μ」
- ii. (bake:<sup>c</sup>=[=]μ) 「奪う .CVB=IPF=μ」
- iii. (uguri:<sup>c</sup>=[=]μ) 「怒る .CVB=IPF=μ」

(49) に示したように、「X.CVB=IPF=NMLZ=ABL」(と提示していない「X.CVB=IPF=TOP」)の枠文においては予測される音調が観察された。

- (49) i. ki:<sup>c</sup>=[=][u=kara 「来る .CVB=IPF=NMLZ=ABL」
- ii. bake:<sup>c</sup>=[=][u=kara 「奪う .CVB=IPF=NMLZ=ABL」
- iii. uguri:<sup>c</sup>=[=][u=kara 「怒る .CVB=IPF=NMLZ=ABL」

これに対して、「X.CVB=IPF=NOM」と「X.CVB=IPF=COM」の枠文においては予測される音調が観察されることがあったとしても、(50)に示す音調が優勢であった<sup>3</sup>。このパターンでは、ピッチの下降が接語化する補助動詞の部分=[の直前に実現しており、素直に解釈すれば、=[に低音調が結びついていることになる。したがって、その拍の直後に韻律語の境界があると解釈しなければならず、結果として(51)に示す韻律構造を想定することになる。

- (50) i. ki:<sup>c</sup>=[=]nu ... 「来る .CVB=IPF=NOM」
  - ii. bake:<sup>c</sup>=[=]nu ... 「奪う .CVB=IPF=NOM」
  - iii. uguri:<sup>c</sup>=[=]nu ... 「怒る .CVB=IPF=NOM」
- (51) i. (ki:<sup>c</sup>=[=])=(nu) ... 「来る .CVB=IPF=NOM」
  - ii. (bake:<sup>c</sup>=[=])=(nu) ... 「奪う .CVB=IPF=NOM」
  - iii. (uguri:<sup>c</sup>=[=])=(nu) ... 「怒る .CVB=IPF=NOM」

(51)に示した韻律構造は先行研究の結果からは予測されないものである。なぜなら、本稿の3.1節で言及したように、これまでの研究では1モーラの接語は韻律語を形成しないとされているからである(松森2014; 青井2016; 五十嵐2015, 2016)。つまり(51)のように1拍の接語=nuなどが韻律語を形成することは、多良間方言の韻律構造について知られているこれまでの結果と食い違っている。しかし(51)において1拍の接語だけを含む韻律語が形成されることについて、果たしてその原因を=nuに求めるべきなのかは慎重に検討しなければならない。なぜなら、進行融合形以外の形式、例えば基本形では、=nuは1拍の韻律語を形成しないからである。基本形に1拍の接語が付いた枠文の音調を(52)に示す。

<sup>3</sup> 本節で扱う枠文は音調の同定が難しく、予測されないパターンが現れたため、第一著者に加えて、第二著者と中澤光平氏にも同定をしてもらい、大多数の音調を採用した。3人とも概ね同様の同定を行っているので、予測されないパターンが聞き間違いの可能性は低い。詳細は「関連データ」を参照。

## (52) 基本形と1拍接語の音調

- i. mi:<sup>c</sup>-[=]nu ... 「見る -FIN=NOM」
- ii. ]... mi:<sup>c</sup>-[=nu [... 「見る -FIN=NOM」
- iii. bake:[<sup>c</sup>=]nu ... 「別れる .FIN= NOM」
- iv. ]... bake:[<sup>c</sup>=nu [... 「別れる .FIN= NOM」
- v. uguna:[<sup>c</sup>=]nu ... 「集まる .FIN=NOM」
- vi. ]... uguna:[<sup>c</sup>=nu [... 「集まる .FIN=NOM」

(52) で観察される音調は、上の (51) とは異なる。すなわち下降調では基本形に付く1拍接語の直前にピッチの下降が実現し、上昇調では1拍接語の直後にピッチの上昇が実現する。このように、下降調と上昇調とが対応するパターンを示しており、両者ともに1拍接語の直後に韻律語の境界があることが分かる。つまり、(53) に示すように、1拍接語が動詞の基本形によって形成される韻律語の中に組み込まれると解釈できる。これは先行研究で予測されるパターンと矛盾しない。

## (53) 基本形と1拍接語の韻律構造

- i. (mi:<sup>c</sup>-[=nu) ... 「見る -FIN=NOM」
- ii. (bake:[<sup>c</sup>=nu) ... 「別れる .FIN=NOM」
- iii. (uguna:[<sup>c</sup>=nu) ... 「集まる .FIN=NOM」

(50) に示した3語の進行融合形と、(52) に示した3語の基本形は、長さ・音節構造・アクセント型においてそれぞれ同じであるが、下降調においても上昇調においても互いに異なる音調が観察されている。そのため、音調の違いはそれぞれの形式の韻律構造の違いに求めるほかはない。つまり、(50) において1拍の接語が1つの韻律語を形成するのは、1拍の接語による現象ではなく、「進行融合形」の韻律構造による現象であると考えざるを得ない。すなわち、表4に示すように、進行融合形は下降調においても上昇調においても2つの韻律語を形成し、基本形とは韻律構造が異なると仮定すれば説明が付く。なおこの解釈は次節の結果からも強く支持される。

表4 基本形と進行融合形の韻律構造

調	基本形 (「別れる」)	進行融合形 (「奪う」)
下降調	(bake:[ <sup>c</sup> =]nu)	(bake: <sup>c</sup> =][l](ø=nu)
上昇調	]... (bake:[ <sup>c</sup> =nu]	]... (ba <sup>c</sup> )([ke: <sup>c</sup> =]nu)

最後に粹文の種類による音調の違いが問題として残っている。現時点ではなぜそのような違いが見られるのかについては分からない。ただし以下のことは共通点として指摘できるだろう。すなわち1拍接語が韻律語を形成しない粹文において、付加される接語の語頭子音は[でであり、接語化する補助動詞の[と二重子音を形成する。韻律語が音節を基に形成されることを考えると、両音節性の有無など、音節構造が関わっている可能性がある。

### 5.3 進行融合形に 1 拍接語の連鎖が付く環境

残りの枠文は進行融合形に 1 拍接語の連鎖 (2 ないし 3) が付いた環境に該当する。順番に上昇調と下降調のパターンを見ていく。

まず、B 群と C 群の上昇調において、5.1 節と 5.2 節と同じパターンが観察され、同様の韻律構造を想定することができる。つまり、(54) のように、進行融合形の末尾音節の直前にピッチの上昇が実現し、そこに韻律語の境界があると解釈できる (55)。このように、上昇調においては 1 拍接語の連鎖が独自の韻律語を形成せず、先行する韻律語に組み込まれる。

#### (54) 進行融合形と 1 拍接語の連鎖の音調

- i. ]... ba[ke:= [=nu=du ... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」
- ii. ]... ugu[ri:= [=nu=du ... 「怒る .CVB=IPF=NOM=FOC」

#### (55) 進行融合形と 1 拍接語の連鎖の解釈

- i. (ba<sup>ˆ</sup>)(ke:= [=nu=du) ... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」
- ii. (ugu<sup>ˆ</sup>)(ri:= [=nu=du) ... 「怒る .CVB=IPF=NOM=FOC」

次に、A 群の k-「来る」については、枠文により（または同じ枠文の発話により）2つのパターンが観察された。1つ目のパターンでは、(54) の B 群と C 群と同様に、進行融合形の末尾音節の直前にピッチの上昇が実現する (56)。このパターンについては 5.1 節で提案した解釈を与えることができる (57)。

#### (56) k-「来る」の進行融合形と 1 拍接語の連鎖の音調 1

- i. ]... [ki:= [=u=ga 「来る .CVB=IPF=NMLZ=NOM」
- ii. ]... [ki:= [=to:= 「来る .CVB=IPF=COM=TOP」

#### (57) k-「来る」の進行融合形と 1 拍接語の連鎖の解釈 1

- i. (∅<sup>ˆ</sup>)(ki:= [=u=ga)
- ii. (∅<sup>ˆ</sup>)(ki:= [=to:=)

もう 1つのパターンでは、ピッチの上昇が 1 拍接語の連鎖の直前に実現する (58)。この音調からすると、1 拍接語の連鎖の直前に韻律語の境界があると解釈しなければならない (59)。

#### (58) k-「来る」の進行融合形と 1 拍接語の連鎖の音調 2

- i. ]... ki:= [=nu=du 「来る .CVB=IPF=NOM=FOC」
- ii. ]... ki:= [=tu=du 「来る .CVB=IPF=COM=FOC」

#### (59) k-「来る」の進行融合形と 1 拍接語の連鎖の解釈 2

- i. (ki:=l)=(nu=du)
- ii. (ki:=l)=(tu=du)

このパターンについて、次の2点を指摘する必要がある。第一に、多良間方言において1拍接語の連鎖はその他の環境において韻律語を形成しないのにもかかわらず、(59)の環境では韻律語を形成する。例えば、基本形に後続する場合と比較してみると、1拍接語の連鎖は韻律語を形成しない(60)(61)。このため、(59)において1拍接語の連鎖が韻律語を形成することは進行融合形の韻律構造と関係していると解釈できる。

(60) 基本形と1拍接語の連鎖の音調

- i. mi:-[=nu=]du 「見る -FIN=NOM=FOC」
- ii. ]... mi:-[=nu=]du [ 「見る -FIN=NOM=FOC」

(61) 基本形と1拍接語の連鎖の解釈：(mi:-[=nu=]du)

第二に、先行研究に従えば、同じ形態統語構造に対しては、同じ韻律構造が写像されることが予測される。(56)と(58)のアクセント資料では、k-「来る」の進行融合基本形に1拍の接語が2つ付いており、形態統語構造が同じなので、同じ韻律構造が写像されるはずである。しかし、予測に反して、表層のレベルで異なる音調を生み出す異なる韻律構造が写像されている(57)(59)。すなわち(57)では、進行融合基本形の末尾音節が2番目の韻律語に組み込まれるが、(59)では、進行融合基本形の末尾音節が1番目の韻律語に組み込まれる。進行融合基本形の末尾音節が異なる韻律語に配分される現象は、次に触れる下降調にも観察されている。

それでは下降調について観察してみよう。下降調では、共通のパターンが1つだけ観察された。いずれの群でも、接語化する補助動詞の部分=[の直前にピッチの下降が実現している(62)。この音調から、=[の拍に低音調が結びついており、その直後に韻律語の境界があると解釈できる(63)。

(62) 進行融合基本形と1拍接語の連鎖の音調（下降調）

- i. ki:=[]=nu=du ... 「来る .CVB=IPF=NOM=FOC」
- ii. bake:=[]=nu=du ... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」
- iii. ugui:=[]=nu=du ... 「怒る .CVB=IPF=NOM=FOC」

(63) 進行融合基本形と1拍接語の連鎖の解釈（下降調）

- i. (ki:<sup>c</sup>=[])=(nu=du) ... 「来る .CVB=IPF=NOM=FOC」
- ii. (bake:<sup>c</sup>=[])=(nu=du) ... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」
- iii. (uguri:<sup>c</sup>=[])=(nu=du) ... 「怒る .CVB=IPF=NOM=FOC」

(63)の解釈は(59)と同じ問題を提示している。すなわち、1拍接語の連鎖は韻律語を形成しないはずなのに、進行融合基本形に付くときには韻律語を形成している。ここでもやはり基本形(c型)との比較が有効である(64)(65)。基本形に2つの1拍接語が付く環境では予測されるパターンが観察される。つまり下降調では最後の接語=du「=FOC」の直前にピッチの下降が実現し、上昇調では最後の接語=du「=FOC」の直後にピッチの上昇が実現する。この音調から、=duの拍に低音調が結びついていることが分かり、基本形と1拍接語の連鎖が全体で1つの韻律

語を形成すると解釈できる。したがって、基本形と進行融合基本形との音調の違いは進行融合形の韻律構造と関係していると指摘できる。

(64) 基本形と1拍接語の連鎖の音調

- i. mi:-[<sup>c</sup>=nu=]du ... 「見る -FIN=NOM=FOC」
- ii. ]... mi:-[<sup>c</sup>=nu=du [ ... 「見る -FIN=NOM=FOC」
- iii. bake:[<sup>c</sup>=nu=]du ... 「別れる .FIN =NOM=FOC」
- iv. ]... bake:[<sup>c</sup>=nu=du [ ... 「別れる .FIN =NOM=FOC」
- v. uguna:[<sup>c</sup>=nu=]du ... 「集まる .FIN =NOM=FOC」
- vi. ]... uguna:[<sup>c</sup>=nu=du [ ... 「集まる .FIN =NOM=FOC」

(65) 基本形と1拍接語の連鎖の解釈

- i. (mi:-[<sup>c</sup>=nu=du) ... 「見る -FIN=NOM=FOC」
- ii. (bake:[<sup>c</sup>=nu=du) ... 「別れる .FIN =NOM=FOC」
- iii. (ugunari:[<sup>c</sup>=nu=du) ... 「集まる .FIN =NOM=FOC」

本節の締めくくりとして、進行融合形に1拍接語の連鎖が付いた環境で、観察される音調とその韻律的解釈が下降調の場合と上昇調の場合とで対応していないことを指摘しておこう。(66)に例を再掲するが、下降調では進行融合形と1拍接語の連鎖がそれぞれ1つの韻律語を形成するのに対して、上昇調では動词语根を割り込む韻律語の構造が見られ、進行融合形の末尾音節を除いた部分、そしてその末尾音節と1拍接語の連鎖が、それぞれ1つの韻律語を形成する。つまり下降調と上昇調とで異なる韻律構造が写像されるわけである。具体的に言うと、下降調と上昇調とでは、形成される韻律語の数が同じであるものの、進行融合形の末尾音節の所属が異なっている。下降調では1番目の韻律語に組み込まれるが、上昇調では2番目の韻律語に組み込まれる。

- (66) (= (63-ii) , (55-i) ) i. 下降調 : (bake:<sup>c</sup>=)]=(nu=du)... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」  
 ii. 上昇調 : (ba<sup>c</sup>)([ke:=]nu=du)... 「奪う .CVB=IPF=NOM=FOC」

このような韻律構造の「交替」はこれまでの研究（青井 2018, セリック 2020）からすると全くの想定外であり、多良間方言の韻律構造形成の理解にとって大きな意味を持つ可能性がある。

#### 5.4 調査結果のまとめ

5節の調査結果は次の3点に要約することができる。第一に、これまで報告のなかったk-「来る」の進行融合形の音調に基づいて、空の韻律語の存在を認める必要がある。

第二に、1拍接語の連鎖が一般的に韻律語を形成しないにもかかわらず、進行融合形に付いた下降調の環境に限って、韻律語を形成する。この現象は、動詞基本形との比較から、進行融合形の韻律構造に由来する現象と考えられる。さらに、上昇調においては進行融合形がどの環境でも明らかに2つの韻律語を形成するという事実から、下降調においても、少なくとも基底のレベ

ルにおいては、進行融合形が2つの韻律語を形成するという分析を提案した。つまり、下降調のいくつかの環境においては空の韻律語の形成を想定することができる。その結果として、表層のレベルでは、1つだけの韻律語が形成されているように見える場合があると主張した。

第三に、(一部の)進行融合形の下降調と上昇調において、異なる韻律構造が写像されることを認めざるを得ない。具体的に言うと、下降調と上昇調とでは、写像される韻律語の数は同じであるものの、進行融合形の末尾音節が前後どちらの韻律語に組み込まれるかが異なる。つまり下降調では進行融合形の末尾音節は1番目の韻律語に組み込まれるのに対して、上昇調では進行融合形の末尾音節は2番目の韻律語に組み込まれる。同じ形態統語構造におけるこのような「末尾音節の所属の交替」という現象はこれまでの研究では全く予測されておらず、多良間方言を含む宮古諸言語の韻律構造の研究にとって大きな意味を持つと考えられる。

## 6. 考察

多良間方言のアクセント型の実現を正しく記述するために、モーラと文節の間に位置する「韻律語」という韻律的単位を導入することが必要であるという点は、先行研究の間でも見解が一致している(松森 2014; 青井 2016, 2017, 2018, 2019; 五十嵐 2015, 2016 等)。しかしこれまでの研究は多良間方言のアクセント体系の一部分(つまり名詞アクセント体系)のみを取り上げて論じられてきたため、そこで提案されてきた韻律語の定義や性質については依然として議論の余地が残されていると言える。例えば進行融合形の音調を対象とした今回の調査では、従来想定されてきた多良間方言の韻律語からは逸脱する現象が見つかっている。本節では、5節の結果を基に、次の2点について考察する。すなわち、A. 韻律語の形成のレベル(6.1節)、そしてB. 進行融合形における「末尾音節の所属の交替」という現象の生起原因(6.2節)である。

### 6.1 韻律語の形成規則の再解釈

多良間方言の韻律語を明確に定義した研究として、主に五十嵐(2015)と五十嵐(2016)の研究がある。これらの研究では、韻律語は、形態統語構造をインプットにして、規則的な形成規則によって写像されると分析されている。提案されている具体的な形成規則を(67)に示す。この規則はその記述(「挿入せよ」)から、後語彙的(post-lexical)な規則として考えられていると推測することができる。

(67) 「2モーラ以上の語根・接語の左端に韻律語境界を挿入せよ」(五十嵐 2016: 38)

(67)の考えに従うと、「同じ形態統語構造を持てば、同じ韻律語の構造が写像される」ということが予測される。しかしながら五十嵐(2015)ですでにこの予測に反するケースが3例報告されている。

第一に、方格を表す =nke: の分析である。=nke: は共時的に1つの3モーラの接語としてしか分析できないものの、韻律的には1拍接語と2拍接語の連鎖と同じ振る舞いを示す(68)(五十嵐 2015: 11-12)。つまり、1拍目のnの部分の先行する韻律語に組み込まれており、残りの2拍

の ke: の部分が韻律語を形成する。

(68) 2 モーラ名詞・接語 =nke: [=DIR] の音調型 (松森 (2014) を引用する五十嵐 (2015) より)。

表記一部変更)

- i. a 型 (gama<sup>a</sup>=n)(ke:) ... 「洞窟に…」
  - ii. b 型 (paru<sup>b</sup>=n)(ke:) ... 「畑に…」
  - iii. c 型 (nabi<sup>c</sup>=]n)(ke:) ... 「鍋に…」
- \*(na]bi)=(nke:) ...

=nke: と同じ振る舞いをする接語として, =jatum [=EMPH] を加えることができる (69)。

(69) 名詞・接語 =jatum [=EMPH] の音調と解釈

- i. a 型 (kuba<sup>a</sup>=:)(tum) ... 「ビロウ樹さえ…」
  - ii. b 型 (mame<sup>b</sup>=:)(tu]m) ... 「豆さえ…」
  - iii. c 型 (adan<sup>c</sup>=]ja)(tum) ... 「アダンさえ…」
- \*(ada]n)=(jatum)

第二に, その形態統語構造からは 1 つの韻律語だけが写像されると予測されるのに, 実際には複数の韻律語が形成される語がある (70) (いずれも五十嵐 (2015) より引用)。

- (70) i. (mju:]<sup>c</sup>)(tura)=(mai) ... 「夫婦も…」
- ii. (ut]u<sup>c</sup>)(dara)=(mai) ... 「兄弟も…」
- iii. (ra]k<sup>c</sup>)(kjo:)=(mai) ... 「辣韭も…」
- iv. (co:]<sup>c</sup>)(gats<sub>1</sub>)=(mai) ... 「正月も…」

(70-i) の mju:]tura 「夫婦」は, mju:]tu 「夫婦」と 1 拍接辞の -ra [-PL] から構成されているため, 1 つだけの韻律語を形成すると予測される。しかし, 実際のピッチパターンを観察すると, ピッチの下降は語頭の 1 拍目の後に生じる。すなわち韻律語の境界は 2 拍目と 3 拍目の間に想定しなければならない。言い換えれば mju:]tura は 2 つの韻律語を形成すると分析しなければならないが, その韻律構造は形態統語構造と一致していない。(70-ii) についても, 同様の問題が指摘できる。

上記の類例として (70-iii, iv) のような漢語がある。漢語を体系的に取り入れていない多良間方言では, 例えば rats<sub>1</sub> 「辣」や kjo: 「韭」という個別の形態素は存在しない。したがって rakkjo: 「辣韭」を複合語として分析することは難しい。つまり共時的に見て rakkjo: は 1 語であると見なすべきであるが, rakkjo: は mju:]tura と同じ音調を示しており, したがって 2 つの韻律語を形成すると分析しなければならない。

第三に, その形態統語構造から 2 つの韻律語が形成されると予測されるのに, 実際には 1 つしか韻律語が形成されない語がある (71) (五十嵐 (2015: 21) より引用。ただし表記を一部変更)。

(71) (少なくとも通時的に) 2 モーラ形態素の境界を含む b 型 4 モーラの名詞

- i. (na:<sup>b</sup>+tani<sup>b</sup>)=(ma]i) ... \*(na:<sup>b</sup>)+(tani)=(ma]i) ... 「菜種も…」
- ii. (munu+ɾ:<sup>b</sup>)=(ma]i) ... \*(munu<sup>b</sup>)+(ɾ)=(ma]i) ... 「言葉も…」
- iii. (adu+paɫ<sup>b</sup>)=(ma]i) ... \*(adu<sup>b</sup>)+(paɫ)=(ma]i) ... 「踵も…」

例えば, (71-i) の語は共時体系において実在する na:<sup>b</sup>「菜っ葉」と tani<sup>b</sup>「種」から構成されており, その形態統語構造からは2つの韻律語を形成することが予測される。しかし実際にはピッチの下降は接語 =mai の中に起こる。もし na:<sup>b</sup>+tani<sup>b</sup> を2つの韻律語として分析するのであれば, 3番目の韻律語の末尾拍に低音調の指定があるということになり, na:<sup>b</sup>のアクセント型(つまり2番目の韻律語末尾に低音調を指定するというb型)とは矛盾が生じる。したがって na:<sup>b</sup>+tani<sup>b</sup> は1つだけの韻律語を形成するという分析の方が望ましい(議論の詳細については五十嵐(2015: 21-23)を参照されたい)。

ここまで形態統語構造と韻律構造とが一致しない3つのケースを見てきた。この中で第三のケースはそれほど問題にならない。なぜならば通時的に複合語に由来する語が形態素の透明性を失った結果, 共時体系において一語化したという説明を与えることができるからである。しかし, 第一と第二のケースには同様の説明を与えることは難しく, 依然として問題である。そればかりか, ここで指摘した振る舞いを示す語は数として決して少ないとは言えない。例えば『南琉球宮古語多良間方言辞典』(渡久山・セリック 2020)の中で, 4モーラかつ1番目と2番目の韻律語に低音調が指定されているという, 比較的珍しい音調を持つ項目だけを見ると, 形態統語構造と韻律構造が一致しない項目が17語も見つかる(72)。後語彙的なレベルで働く形成規則を想定すると, これらの語は全て「例外」と見なさざるを得ない。

- (72) (u]pu)(gi:]「それぐらいの大きさ」 (i]da)(ke:]「どれぐらいの高さ」  
 (i]pu)(gi:]「どれぐらいの大きさ」 (u]i)(kjo:]「ウイキョウ」  
 (u]ga)(tta:]「そいつ」 (u]pu)(ga:]「それぐらいの大きさ」  
 (ka:])(puja]「風の種類」 (ka]pu)(ge:]「あれぐらいの大きさ」  
 (gi]t)(tco:]「遊びの種類」 (ku]ga)(tta:]「こいつ」  
 (ku]da)(ke:]「これぐらいの高さ」 (ku]na)(ge:]「これぐらいの長さ」  
 (ku]pu)(ga:]「これぐらいの大きさ」 (ca]n)(cufu]「シャコガイ」  
 (s]tu)(gats]「盂蘭盆」 (na]da)(ka:]「同じ高さ」  
 (na]na)(ge:]「同じ長さ」

ここで, 5節で検討してきた進行融合形の韻律的な振る舞いが重要となる。先行研究で想定されているような韻律語の形成規則では, 接語化する補助動詞の部分が1拍である場合, 進行融合形が1つの韻律語を形成することが予測される。具体的に言うと, 進行融合形が1拍接語の付いた, 同じ拍数・音節構造のc型名詞と同じ音調を示すはずである。しかし, 5節で詳しく見てきたように, 実際には形態統語構造からは予測されないピッチパターンが観察される(73)。したがっ

て後語彙的な形成規則を想定すると、(73) の対立を説明することができない。

- (73) i. kaçi:<sup>c</sup>=n => (kaçi:<sup>c</sup>=]n) ~ ]... (kaçi:<sup>c</sup>=n]) 「手伝いに」  
 ii. bake:<sup>c</sup>=] => (bake:<sup>c</sup>=]l)(ø) ~ ]... (ba<sup>c</sup>)([ke:=l) 「奪っている」

上の (73) のような対立は、韻律語の形成が規則によって自動的に決まるのではなく、むしろ基底のレベルで指定されていることを示唆している。つまり、=] は 1 拍の接語でありながら、韻律語を形成することが指定されている形態素であるからこそ、韻律語の形成指定がない他の 1 拍接語との対立がありうる。そればかりでなく、韻律語の形成が基底のレベルで指定される 4 という分析を採用すると、(72) に示した語を「例外」として扱う必要が全くなくなるため、この分析の方が後語彙的な形成規則より説明力が高いとも言える。

## 6.2 韻律構造の交替の動機

5 節で見てきたように、進行融合形について、そのピッチパターンを適切に捉えるためには、下降調と上昇調において異なる韻律構造が写像されることを想定しなければならない。具体的に言うと、下降調と上昇調とでは、進行融合形の末尾音節が異なる韻律語に振り分けられる。つまり、進行融合形の末尾音節が、下降調では 1 番目の韻律語に所属するのに対して、上昇調では 2 番目の韻律語に所属する (74)。同じ形態統語構造でありながら、下降調と上昇調とで、このような「韻律語の所属の交替」という現象が起こりうることはこれまでの研究で予測されていない。

- (74) i. 下降調 : (bake:<sup>c</sup>=]l)(ø) 「奪っている」  
 ii. 上昇調 : (ba<sup>c</sup>)([ke:=l) 「奪っている」

進行融合形の末尾音節の所属が下降調と上昇調で交替するという現象がなぜ起きているのかについて、現時点では十分な説明を与えることができない。本稿では、進行非融合形の表層の音調が関わっている可能性について指摘するに留める。

多良間方言では、進行融合形と進行非融合形が自由に交替しており、明らかに同一の形式、少なくとも同一構文の異形態として認識されていると言える。したがって進行融合形が形成されるときに、可能な範囲で「進行非融合形と同じ音調を産出させる」という制約が働いている可能性がある。進行融合形と進行非融合形の音調を比較してみよう (75)。進行非融合形の補助動詞は、下降調においては低く発音されているのに対し、上昇調においては高く発音されている。同様に、進行融合形において補助動詞に相当する接語 =] は、下降調においては低く発音されているのに対し、上昇調においては高く発音されている。つまり、進行融合形と進行非融合形において、補助動詞 bur- とそれに由来する接語 =] が同じ高さになっていることが分かる。

<sup>4</sup> ここで言う「形成指定」は単に韻律語の数の指定だけであって、韻律語の境界位置は含まない。韻律語の数は基底のレベルで指定されているが、表層のレベルにおける韻律語の境界の位置は後語彙的に決まると考えている。

- (75) i. 下降調：(bake:<sup>c</sup>)](bu<sup>a</sup>) 対 (bake:<sup>c</sup>)](ø) 「奪っている」  
 ii. 上昇調：(bake:<sup>c</sup>)]([bu<sup>a</sup>]) 対 (ba<sup>c</sup>)](ke:=l) 「奪っている」

このように、進行融合形における補助動詞に当たる部分の高さを、進行非融合形における補助動詞の高さに合わせなければならないという制約が働いているのではないだろうか。しかし、多良間方言では、表層の高さを操作するためには、韻律構造を操作するほかはない。そして、韻律語が音節を基に形成されていることを考えると、結局、音節の所属を変える以外手段がない。つまり下降調では、=lの部分を下向きに低くさせるために、=lが含まれている音節を1番目の韻律語に組み入れる必要がある。これに対して、上昇調では、=l部分を高くさせるために、=lが含まれている音節を2番目の韻律語に組み入れる必要がある。

さらに、進行融合形と進行非融合形における補助動詞の部分の「高さを合わせる」という制約は非常に強力であると考えられる。なぜならば、(bake:<sup>c</sup>)](nu)のように、進行融合形に1拍接語が付いたときに、1拍の接語が韻律語を形成できないという強い制約を破ってでも、=lが含まれている音節を1番目の韻律語に編成させているからである。逆に、韻律構造の操作がなくても補助動詞の部分と同じ高さになる場合は、下降調と上昇調において同じ韻律語の構造が写像されている(76)。

- (76) i. 下降調：(bake:<sup>c</sup>)](bura<sup>a</sup>-da)-(tal) 対 (bake:<sup>c</sup>)](ra-da)-(ta)] 「奪っていなかった」  
 ii. 上昇調：(bake:<sup>c</sup>)]([bura<sup>a</sup>-da)-(tal) 対 (bake:<sup>c</sup>)](ra-da)-(tal) 「奪っていなかった」

## 7. おわりに

本稿では、多良間仲筋方言の進行融合形に関する詳細な調査を行った結果、以下の3点を明らかにした。第一に、k-「来る」の進行融合形の音調に基づき、空となる韻律語の存在を認める必要がある。第二に、進行融合形が表層のレベルで1つだけの韻律語を形成するかのように見える環境があっても、どの環境においても少なくとも基底のレベルにおいては2つの韻律語を形成する。第三に、一部の進行融合形について、これまでの全ての先行研究の予測に反して下降調と上昇調とで異なる韻律構造が写像される。第一と第二の点に基づき、韻律語の形成（つまり形成される韻律語の数）が後語彙的な規則によって決まるのではなく、基底のレベルで指定されているという新しい分析を提案した。なお、第三の点の生起原因については、進行融合形の表層の音調を進行非融合形の表層の音調に合わせるために、音節が操作されているという説明を試みた。

本稿で提案したように、もし韻律語の形成が本当に基底のレベルで指定されるのであれば、これまで「例外」と見なされてきた語について再解釈の可能性が出てくる。例えば、2つの韻律語を形成する(mju:)](tura)「夫婦」の語についてそれを「複合語」、または複合語に準じる語として分析する必要性がなくなる。つまり、この新しい分析では、(mju:)](tura)「夫婦」はc型の1語であるが、(panbi]m)「天麩羅」などと異なり2つの韻律語を形成することが基底で指定されている。

## 略号

ABL	Ablative	ACC	Accusative	COM	Comitative
CVB	Converb	DIR	Directional	EMPH	Emphatic
FIN	Finite	FOC	Focus	FUT	Future
GEN	Genitive	IPF	Imperfective	NEG	Negative
NMLZ	Nominalizer	NOM	Nominal	PL	Plural
PST	Past	QUOT	Quotative	TOP	Topic
VOL	Volitive				

## 参考文献

- 青井隼人 (2016) 「南琉球宮古多良間方言の三型アクセント—その特徴と型の中和—」『音声研究』 20 (3): 66–80.
- 青井隼人 (2017) 「南琉球宮古多良間方言における 2 種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』 13: 1–23.
- 青井隼人 (2018) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』 14: 1–27.
- 青井隼人 (2019) 「南琉球宮古多良間方言の欠性的低音調」『音韻研究』 22: 3–10.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学』 8: 1–42.
- 五十嵐陽介 (2016) 「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』 150: 33–57.
- セリック・ケナン (2020) 「南琉球宮古語史」博士論文, 京都大学.
- 渡久山春英, セリック・ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』東京：国立国語研究所言語変異研究領域.
- 松森晶子 (2010) 「多良間島の 3 型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 (監) 『日本語研究の 12 章』 490–503. 東京：明治書院.
- 松森晶子 (2014) 「多良間島のアクセント規則を再検討する」『日本女子大学紀要 文学部』 63: 13–36.
- 松森晶子 (2016) 「多良間島における文のプロソディー：韻律句が連なる場合の音調交替現象について」キックオフワークショップ「語のプロソディーと文のプロソディーの相互作用」. 国立国語研究所, 2016 年 1 月 11 日.
- Boersma, Paul and David Weenink (2020) Praat: Doing phonetics by computer. Version 6.1.30, retrieved 3 November 2020 from <http://www.praat.org/>

## Prosodic Structure of the Tarama Dialect: Description and Interpretation of the Tonal Pattern of the Fused Progressive Verbal Forms

CELIK Kenan<sup>a</sup>      AOI Hayato<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Language Variation Division, Research Department, NINJAL

<sup>b</sup>ILCAA / Language Variation Division, Research Department, NINJAL

### Abstract

In this paper, we report extensive fieldwork results concerning the tonal pattern of the fused progressive verbal forms in the Nakasuji Tarama dialect of Southern Ryukyuan Miyako. There were three main results: 1. Based on the tonal pattern of the fused progressive form of *k-* 'come', the existence of empty prosodic words must be posited; 2. even if in some environments the progressive verbal forms seem to form only one prosodic word at the surface level, they must nevertheless be analyzed as forming two prosodic words at the underlying level; and 3. in the case of some of the fused progressive verbal forms, there exists an alternation in the prosodic structure between the falling and rising patterns, a phenomenon that is not predicted to occur according to the previous research so far.

Based on these results, we propose a new analysis concerning the derivation rules of the prosodic word. We argue that the prosodic word is not derived through regular rules at a post-lexical level but is instead specified at the underlying level. Lastly, focusing on the surface tonal patterns of the fused form and its non-fused counterpart, we propose a tentative explanation for the alternation found in the prosodic structure of some of the fused progressive verbal forms.

**Keywords:** prosody, lexical prosodic system, fused form, Tarama dialect